

## グローバル資本主義と疎外された公共圏

内省的理性と公共的理性の弁証法

大倉 茂 (おおくら しげる)

### 【全体の構成】

1. 課題設定と概要
2. 孤独な理性への転化
3. 公共圏と公共的理性
4. 公共圏の疎外を越えて

---

### 1. 課題設定と概要

本報告の課題は、グローバル資本主義が跋扈する現代社会においてそれに対抗しうる公共圏が疎外されている状況を、内省的理性と公共的理性との対比を通して理性のあり方に焦点をあてて素描し、公共圏の疎外状況を克服する方向を示すことにある。

グローバル資本主義の飽くなき拡大は、単にわれわれの生活のすみずみまで資本主義を行き渡らせるだけでなく、環境問題や格差問題といったようにわれわれ自身の中にも深く入り込んでくる。グローバル資本主義が、拡大、深化をつづける中で、そのネガティブなあり方が露骨なまでに表出しているにも関わらず、それに対抗しうる公共圏が必ずしも機能しているとは言えない。それはなぜか。そのことを理性のあり方を考えることを通して考えていきたい。

資本主義による物象化によって、内省的理性が前景に出し、公共的理性が後景に退け、理性を孤独な理性に転化させる。公共的理性を異なる世界や異なる他者にひらかれた理性と理解するならば、内省的理性は自らを反省的に捉える理性と理解できよう。そこで思い出されるのが、デカルトのコギトである。コギトによって導出した思惟実体の能力である理性こそが内省的理性であると言える。なぜなら、自らを自らで疑う過程によって見出された。まさに自らを自らで反省する、すなわち内省によって見出されたのである。コギトに基づく人間の規定が、近代個人主義であるすれば、近代個人主義の理性のあり方が内省的理性であることも確認されよう。近代個人主義という近代における人間の規定は、象徴的にはコギトにより意識的に、そして私的所有により社会的に作られ、意識的にも社会的にも個人の独立性が強調される。同時に、その理性のあり方は、内省的理性が前景に出て、公共的理性が後景に退き、理性を孤独な理性に転化している。そのように考えるならば、公共圏を生み出した近代のあり方自体に公共圏を歪めてしまう可能性が内包されていたこととなる。

公共的理性が後景に退いてしまった理性は、内省的理性が前景に出てくることとなる。そのような孤独な理性のあり方は、既成のイデオロギーの再生産として現前に現れる。公共圏を人間と人間の理性的なつながりによる自由な言論・活動空間であるとするならば、現代社会において公共圏は構築自体が難しくなってしまうと同時に、歪んだ公共圏にならざるを得ない。現代社会における公共圏は、公共性を持たない孤独な理性に基づく、形式的な言論・活動空間に墮しているのではあるまいか。すなわち、公共圏が疎外されている状況があるのではないだろうか。そういった疎外された公共圏をさして、公共圏

そのものに対する悲観的な言説もある。

そのような状況下の中で、公共的理性のあり方を前景に出し、内省的理性と公共的理性の止揚を通して、公共圏の疎外状況をいかに克服するかをわれわれは考えなければならないだろう。

## 2. 孤独な理性への転化

公共圏の疎外状況の中で、グローバル資本主義に対抗しうる公共圏（グローバルな公共圏）の構築の必要性はさまざまに論じられている。たとえば経済学者のピケティは、グローバル資本主義に対抗するために資本税の導入を求めるが、資本税導入の意図は世界中の銀行ないしは金融機関の情報の民主主義的な透明化にあるという。それというのもピケティによれば、「今日の世界が直面している大問題—社会国家の未来、新エネルギー源への転換費用、途上国の国家構築など—について、理性的な論争を行うのはとてもむずかしい」（ピケティ 2014：543）という。すなわち、公共圏の構築がむずかしいという。それは何に起因するかといえば、それは世界の富の分布があまりにも不透明なままであることにあるという。民主主義的な透明化を図ることを通じて、グローバル資本主義に対抗しうる、グローバルな規模の公共圏、すなわちグローバルな公共圏を構築できるのである。ここから、敷衍して考えてみると、現代社会は銀行ないしは金融機関の情報に関して信頼できる情報をわれわれは持ち合わせてはいない。したがって、グローバル市場経済に対する対抗しうるグローバル公共圏は、疎外されているばかりか信頼できる情報という条件すら与えられていないのである。このことからわかることは、公共圏には公的な信頼できる情報が不可欠であるということである。したがって、グローバルな公共圏の構築が困難になっているあるいは、疎外されている状況は、行政の役割も関わっているものの、本報告では理性の問題に焦点をあてて考える。

公共圏の疎外された状況は、孤独な理性のあり方に起因すると考える。そして、先にも述べたように、理性を孤独な理性へ転化させているのは、資本主義による物象化にその原因を求めることができる。物象化は、人間と人間の関係が、モノとモノとの関係になることであると理解される。人間と人間の関係が、モノとモノとの関係になることを理性の次元で考えれば、人間が理性にもとづく関係を持っていないばかりか、過度に内省的になる。人間を孤立化させる物象化は、公共的理性を後景に退け、内省的理性を前景に引き出す。

同時に、思い出されるのがコギトである。コギトによって導出した理性こそが内省的理性であるといえる。なぜなら、自らを自らで疑うこと、コギトはそういった過程によって見出された。まさに自らを自らで反省する、すなわち内省によって見出されたのである。そうして見出された考える私は、実体であった。ここでいう実体とは、他のものに依存しないで、独立している存在を指す。したがって、考える私は、他のものに依存しないで、独立している存在であるということになる。そのように見出された考える私の能力である理性も他者との関係を絶たれた内省的理性であるといえよう。

私的所有にもとづく社会的な〈個〉の排他性、意識的な〈個〉の実体としてのあり方という、二つの〈個〉によってもたらされる人間の〈個〉的なあり方が近代における個人主義、すなわち近代個人主義であるとするならば、近代個人主義の理性のあり方が内省的理性が前景にある孤独な理性であることも確認されよう。まとめると、近代個人主義という近代における人間の規定は、意識的に、そして社会的に作られ、意識的にも社会的にも個人の独立性が強調される。同時に、その理性のあり方は、公共的理性のあり方が後景に退き、内省的理性が前景に出てくる結果、孤独な理性が際立つことになる。しかし

ながら、そういった論理はすでにデカルトの思想に内包されていたといえる。デカルトが思惟する実体といったときに、人間の〈思惟する〉というあり方を実体として捉えたことから、こうした帰結は準備されていたといえよう。

公共的理性が後景に退き、内省的理性が前景に出て、理性が孤独な理性に転化し、孤独な理性は、共感などといった感性や他者とのかかわりが欠如しているがゆえに利己主義として表出する。その利己主義は、一方で引きこもり現象として、他方で既成のイデオロギーの再生産として現前に現れる<sup>i</sup>。ハーバマスは、「破壊された公共圏のなかでは、互いに孤立し疎外しあう行為者たちはますます大衆化してゆき、監視の対象となり、群集化した動きをするようになる」（ハーバマス 2002：98〔下巻〕）と述べている。私なりに言い換えれば、権力による言説の無批判的な、そして盲目的な再生産が公共圏において行われることとなる。そうなれば、もはや公共圏は、疎外された公共圏になりさがってしまうことになるだろう。

### 3. 公共圏と公共的理性

カントは、「思考の方向を定める問題」（1786年）において以下のように述べている。

思考の自由は、まず第一に公民的強制に対立せしめられる。話したり書いたりする自由は、上部の権力によってわれわれから奪い去られることがあり得ても、考える自由は権力によって奪われることは全然ないと人びとは言うだろう。しかし、われわれはわれわれが自分の思想を伝えまた彼らの思想をわれわれに伝えるべき他の人びとといわば共同して考えるのでなければ、いったいどれだけのことが、またどのような正しさをもって考えられるだろうか！（カント 1966：25）

ここでカントは、他者と「共同」して考えることの必要性を強く主張している。公共圏は、このカントの「共同」して考えることに基礎があると考えられる。その「共同」して考えることを可能にするのが、異なる世界や異なる他者にひらかれた理性である公共的理性である。

公共圏は、具体的な関心を共有することを契機とした異質性にもとづく人間のまとまりであるとする。同時に、その公共圏としてまとまりうる人間の性質を公共性とする。具体的な関心を共有することを契機とした異質性にもとづくことから、公共圏の二つの性格を引き出すことができる。第一に、開放性である。関心を共有する者であれば、だれでも公共圏に参加することが可能である。第二に、異質性にもとづくがゆえに、感情、感性によるつながりをもてないことから、理性と関連が深い。公共圏においては、人間は考えることでつながるのである。したがって、公共圏は人間の意識的な〈個〉のあり方を前提としており、それは公共圏の登場を近代に至るまで待たねばならなかった理由でもある。

公共圏は近代において登場し、そして疎外されている状況にある。したがって、現代社会の疎外された公共圏のあり方のみをみて、公共圏に悲観的になってはならない。疎外された公共圏をもって、公共圏の無意味さを強調することは、現代社会の軋轢を感じつつも、どうせ社会は変わらないとあきらめて、なかば積極的に現状を肯定していく姿勢と軌を一にしている。

### 4. 公共圏の疎外を越えて

マルクスは、『経済学・哲学草稿』（1843-45年）において以下のように述べている。

動物はその生命活動と直接的に一つである。動物はその生命活動から自分を区別しない。動

物とは生命活動だからである。人間は自分の生命活動そのものを、自分の意欲や自分の意識の対象にする。彼は意識している生命活動をもっている。(マルクス 1964 : 95)

すなわち生命活動によって意識が立ち上がるのである。そして、引き続き以下のように述べている。

意識している生命活動は、動物的な生命活動から直接に人間を区別する。まさにこのことによってのみ、人間は一つの類的存在なのである。あるいは、人間がまさに一つの類的存在であるからこそ、彼は意識している存在なのである、すなわち、彼自身の生活が彼によって対象なのである。(マルクス 1964 : 95-96)

意識している生命活動によってのみ人間は一つの類的存在であるとマルクスが述べていることから、意識している生命活動によってのみ人間は共同性をもつといえる。以上のことをまとめるならば、人間は生命活動によって意識が立ち上がり、その意識している生命活動によって共同性が生まれるのである。したがって、意識は、デカルトが論じるような実体として存在するのではなく、その背景には生命活動や人間の共同的な関係の網の目があるのである。このことを公共圏の文脈に置き換えて言い換えれば、具体的な生を共有する共同体<sup>ii</sup>を基礎にもつからこそ、自由意志にもとづく公共圏を確立することができるのである。

繰り返すが、コギト原理によって導出されたあたかも実体として考えられる意識の背景には、人間の生命活動や共同的な関係の網の目があるのである。また、意識の能力である理性に関して考えてみても、理性はその成り立ちから考えても他者との関係を抜きに考えることができない。したがって、理性は、その成り立ちから考えても、公共的理性としてのあり方と内省的理性としてのあり方を備えているといえよう。そして、単に前近代回帰として共同体の再興を目指すのではなく、あくまで公共圏の担保のために、具体的な生を共有する共同体を基礎に社会を構想することが重要である。

孤独な理性から内省的理性と公共的理性が響き合う理性へ理性のあり方を模索することで、グローバル資本主義に対抗可能な公共圏を成立させることが可能になるだろう。

#### 【主な参考文献・引用文献】

大倉茂 (2015) 『機械論的世界観批判序説』学文社 (近刊予定)

大倉茂 (2015) 「環境危機を踏まえた人間の現代的なあり方—『ケアの倫理』批判から考える—」、上柿他編『環境哲学と人間学の架橋』世織書房

大倉茂 (2015) 「脱近代のグローバルガバナンス—ローカルな自治組織を考える—」『環境思想・教育研究』環境思想・教育研究会、第8号、pp24-30

カント (1966) 「思考の方向を定める問題」『カント全集・第十二巻』(門脇卓爾訳) 理想社

ハーバマス (2002) 『事実性と妥当性』(河上倫逸他訳) 未来社

ピケティ (2014) 『21世紀の資本』(山形他訳) みすず書房

マルクス (1964) 『経済学・哲学草稿』(城塚登・田中吉六訳) 岩波書店

<sup>i</sup> またハーバマスは以下のように述べている。「自由な政治的文化およびそれに応じた社会化範型のコンテクストにおいて、あるいは、無傷の私事性という基盤のうえにおいて、はじめて、市民の活発な市民社会は十分に作りあげられる。つまり、そうした市民社会は、すでに合理化された生活世界においてのみ発展しうる。そうでない場合には、資本主義的近代化によって危機に瀕した生活世界の硬直した伝統を盲目的に擁護するポピュリズムの運動が発生する」(ハーバマス 2002 : 98 [下巻])

<sup>ii</sup> 共同体は、具体的な生を共有することを契機とした同質性にもとづく人間のまとまりであるとする。同時に、その共同体としてまとまりうる人間の性質を共同性とする。共同体の三つの性格を引き出すことができる。共同体は決して過去の遺物ではなく、共同性を備える人間にとって共同体は、人間にとって根源的な意義がある。過去に戻るのではないかたちで、いかに人間の共同性を十全に発揮する領域を創出するかが求められている。